

# 「今こそ映画を！」 第33回東京国際映画祭のレポート

為ヶ谷 秀一



第33回東京国際映画祭ポスター

©2020 TIFF

2020年10月31日から11月9日の10日間に亘って、東京・六本木ヒルズを中心に「東京国際映画祭」が開催された。例年、長編映画作品を中心としたコンペティティブ国際映画祭として注目されて来ており、今年は33回目の開催となった。2020年は、東京オリンピック・パラリンピックの開催が予定されていたこともあり、日本が世界から注目を受ける中で、日本の映画・映像文化の魅力を発信する大きなイベントとなる事が期待されていた。しかし、新型コロナウイルスのパンデミックにより、東京オリンピック・パラリンピックの一年延期が決まり、新型コロナウイルスの感染の拡がり懸念される中での国際映画祭の開催となり、例年とは違った形で行われた。

新型コロナウイルスのパンデミックにより、世界中で開催が予定されていた名だたる国際映画祭が延期や中止になったり、またオンラインでの開催となったりしている中で、感染防止対策を十分に取りながらの

リアルな映画館での観客に対する上映機会を実現させ、関連するイベントのオンラインでの開催を組み合わせたハイブリッドな映画祭となっていた。

今年は、国際審査委員や海外からの作品ゲストの来日が不可能になり、従来から行われてきたコンペティションは行われず、「TOKYO プレミア 2020」というショーケース部門が新設され、唯一観客の投票による「観客賞」が優秀作品に贈られることになった。

筆者は、10月31日の国際映画祭のオープニング・セレモニーと、11月5日に開催された第17回文化庁映画週間シンポジウム「コロナ禍を経てこれからの映画製作」に参加したので、その概要を報告する。

## 東京国際映画祭

### オープニング・セレモニー

映画祭オープニング・セレモニーの前に行われるゲストのレッドカーペット・イベントは、例年は六本木ヒルズ・アリーナで大勢の観客を前にして華やかに行われていましたが、今年は感染予防対策のため、オープニング・セレモニー会場となった東京フォーラム（東京都千代田区）・ホールCのロビーで、レッドカーペット・イベントを模した形で行われた。報道陣を前にしてゲストが華やかに登場し、インタビューを受けながらオープニング会場に入場して行くシンプルなセレモニーとなっていた。

オープニング・セレモニーでは、「Film Scope Philharmonic Orchestra」による名作映画のテーマ音楽のメドレーが、華やかに演奏されて映画祭の開催を盛り上げていた。映画祭のチェアマン・安藤裕康氏は、「コロナ禍での映画祭の開催が実現できたことは感無量です。未来への映画の火を灯し続けたいと思い、リアルな映画祭の実施を決断しました。」と開会の宣言をした。この状況下でのリアルな映画祭の開催は、大きな決断であったと感じた。

オープニング・セレモニーでは、出品作品のキャストやスタッフが、ゲストとして次々と登場し、作品についてのインタビューを受けていた。また、海外の映画人からのお祝いのビデオメッセージなどが紹介されて、映画祭の雰囲気盛り上げていた。

今年の映画祭のアンバサダーを務める俳優の役所広司氏は、今年の映画祭では、観客が良かった映画を自ら選ぶ「観客賞」が設けられたことについて、「観客が映画を評価するのは一番正しい。素直に心を動かされた作品に投票することが大事です。観客が重要な役割を担うのは、映画祭の熱気につながる。」と述べた。

“日本の今”を国内そして世界に紹介する今年の「Japan Now」部門では、深田晃司監督が選ばれ、監督の作品が特集されて上映されることになった。深田監督とキャストが登場し、会場から大きな拍手を受けていた。

オープニング・イベントの最後には、今



(写真) レッドカーペット・イベントは、ホールロビーのレッドカーペットを模した会場で行われ、ゲストの入場や作品についてのインタビューなどが、ムービーやカメラの取材陣による撮影が行われた。また、隣接するブースでのモニター画面によるプレス取材も行われた。



(写真) 第33回東京国際映画祭フェスティバル・アンバサダー 役所広司氏 (©2020 TIFF)



(写真) オープニング・セレモニーでの「Film Scope Philharmonic Orchestra」による映画音楽の演奏

年の東京国際映画祭のオープニング作品に選ばれたワールドプレミアム作品「アンダーブック」(武正晴監督)のキャストが紹介された。セレモニー終了後、この作品の上映が行われて、第33回東京国際映画祭がスタートした。

<https://www.youtube.com/watch?v=XOjss4yTgNk>

(第33回東京国際映画祭オープニング・セレモニー)

主催者の発表による、今年の映画祭における動員数

・上映動員数 / 40,533 人、上映作品数 / 138 本 (10 日間)

(昨年第32回: 64,492 人 / 183 本 (9 日間))

・その他のリアルイベント動員数: 7,272 人

・オンラインイベントの動員数: 847,873 人

※ 11月9日に行われた映画祭クロージングセレモニーで、「TOKYO プレミアム 2020」部門 観客賞 / 東京都知事賞 受賞作品として『私をくいとめて』(日本: 大九明子監督作品)が受賞した。

## 第17回文化庁映画週間

### 第33回東京国際映画祭 共催・提携企画 シンポジウム: 「コロナ禍を経て これからの映画製作」

11月5日、六本木アカデミーヒルズ・タワーホールで、第17回文化庁映画週間のシンポジウム「コロナ禍を経てこれからの映画製作」が開催された。今年のシンポジウムは、参加者の数は感染予防対策のために制限されていたが、オンラインによるライブ配信も行われた。

登壇者: 清水崇 (監督) / 紀伊宗之 (東映株式会社 プロデューサー) / 福島大輔 (松竹株式会社 プロデューサー) / 渡邊由香里 (せんだい・宮城フィルムコミッション) モデレーター: 関口裕子 (映画ジャーナリスト、ライター、編集者)

今年に入ってからからのコロナ禍で、多くの

### シンポジウム「コロナ禍を経てこれからの映画製作」

2020年11月5日 [木] 14:00~(開場13:30) 会場:六本木アカデミーヒルズ タワーホール

映画文化の最新動向を紹介するシンポジウム。「コロナ禍を経てこれからの映画製作」をテーマに、今年撮影・製作が行われた監督やプロデューサーをゲストに招き、今後の映画製作についてお話しいただきます。 [配信有。詳しくはホームページをご覧ください。]

■ 登壇者 清水崇 / 紀伊宗之 / 福島大輔 他予定



しみずたかし  
**清水崇**  
監督

大学で演劇を専攻し、小道具、助監督を経て、98年、関西テレビの短編枠で商業デビュー。東映Vシネマで原案・脚本・監督した「呪怨」シリーズ(99)が口コミで話題になり、劇場版(01,02)を経て、サム・ライミ監督によるプロデュースの元、USリメイク版「THE JUON/呪怨」(04)でハリウッドデビュー。日本人初の全米興行成績No1を獲得。続く「呪怨バンドミック」(06)も全米No1に。その他「輪廻」(05)、「ラビット・ホラー3D」(10)、「魔女の宅急便」(14)。そして、興収14億円を記録した「犬鳴村」(20)など。次回作「樹海村」が21年2月5日公開予定。



きいむねゆき  
**紀伊宗之**  
東映株式会社  
プロデューサー

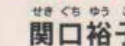
株式会社ディジジョイの会社立ち上げより参加。各地の新設劇場の支配人、番組編成を経て、新橋バルト9を統括後、14年に東映株式会社に異動。「幕が上がる」(15/本広克行)、「リップヴァンウィンクルの花嫁」(16/岩井俊二)、「HK 変態仮面 アブノーマル・クライシス」(16/福田雄一)をプロデュース。近年は東映らしい骨太なタイトルを企画プロデュース。「孤狼の血」(18/白石和彌)、「犬鳴村」(20/清水崇)、「初恋」(20/三池崇史)、「サイレント・トーキョー」(20/波多野真文/12月4日公開)などがある。「樹海村」は6月~7月に、「孤狼の血2(仮)」(白石和彌)は10月から撮影中。



ふくしまだいすけ  
**福島大輔**  
松竹株式会社  
プロデューサー

2003年、商社から転職し松竹株式会社に入社。初プロデュース作品は「犬と私の10の約束」(08/本木克英)。その後宣伝部にて「シュアリー・サムデイ」(10/小栗旬)、「こちら葛飾区亀有公園前派出所 THE MOVIE 勝どき橋を封鎖せよ!」(11/川村泰祐)などの作品において宣伝プロデューサーを務めたのち、再び映画企画室に戻り「天空の蜂」(15/堤幸彦)、「RANMARU神の舌を持つ男」(16/堤幸彦)、「8年越しの花嫁〜奇跡の実話」(17/瀬々敬久)、「私がモテてどうすんだ」(20/平沼紀久)、「さんかく窓の外側は夜」(21/森ガキ伸久)。6月~7月に撮影した「覆れなかった者たちへ」(21年公開予定/瀬々敬久)の企画・プロデュースを手掛ける。

■ モデレーター



せきぐちゆうこ  
**関口裕子**  
映画ジャーナリスト  
ライター・編集者

株式会社キネマ旬報社取締役編集長、アメリカのエンタテインメント業界紙VARIETYの日本版「バラエティ・ジャパン」編集長を経て、フリーに。

(写真) シンポジウム登壇者 (文化庁映画週間パンフレットより)



(写真) 文化庁映画週間パンフレット

映画作品の制作が中断や延期される状況に置かれていた。シンポジウムのテーマは、映画製作の現場はどのような状況であったのかを、監督やプロデューサー、更に地方ロケのサポートをするフィルムコミッションの方々、それぞれの経験を通して考えたことを報告すると共に、これからの映画製作に向けての課題を議論し、映画製作を続けるためになすべき指針を示すことを目指したシンポジウムでの議論が行われた。コロナの感染が拡大する中で、映画製作に携わる人たちは、コロナへの感染予防対策に腐心しながら、現場での映画製作を進めていた状況を知ることが出来た。

ホラー映画作品で著名な清水崇監督と東映の紀伊宗之氏は、真夏の6月から7月に製作を行った映画の現場の状況を語った。コロナの感染に不安を持つキャストやスタッフに対して、出来る限りの感染予防対策をすることを明示して、リモートによる説明会を行いながら製作に取り組んだ。ガイドラインやマニュアルを作成し、具体的に現場での体温測定や体調管理を行う衛生班を設けている。それでも、感染が発生する恐れは拭い去れなかったと、苦悩する現場の状況を語った。

松竹の福島大輔氏は、今年6月から7月に掛けて、舞台設定が仙台のため、仙台でのロケによる映画製作を行った。コロナの

感染が拡大する東京からのスタッフの移動が懸念されていた時期で、せんだい・宮城フィルムコミッションの渡邊由香里氏（リモートで参加）は、受け入れる事に懸念があったと言う。ロケ地によってそれぞれの市町村の対応がまちまちであり、十分な感染予防対策を行うことで何とか説得することが出来たと言う。フィルムコミッションの活躍により、地元の説得が得られたとして、ロケ地のインセンティブを最大限追及することを基本に、地域との連携が大切であることが示された。撮影のスケジュールの変更や、状況による脚本の変更など、柔軟な対応と共に、緊急時を想定した製作予算の確保とスケジュールを十分に確保することが求められていると言える。

登壇者のパネル討論と共に、参加者（オンラインも含む）との間での議論が行われた。

アニメーション映画「鬼滅の刃」の大ヒットが報じられる中でも、映画は、低予算で切り詰められたスケジュールの中で、多くの映画が製作されている。韓国の映画がオスカーを取る時代になってきた。日本映画のマーケット拡大に向けた積極的な取り組みが求められている。



(写真) リモートのパネラーも交えたシンポジウムの登壇者



(写真) 清水監督、紀伊プロデューサーが取り組んだ映画「樹海村」の現場の状況を報告する。



(写真) 松竹の福島氏は、映画「護られなかった者たちへ」(瀬々敬久監督)の撮影状況について報告した。

それぞれ、コロナ禍の時代であっても、これからも映画製作に取り組む、前向きな姿勢を強調していた。(了)

**Hideichi Tamegaya**  
メディア・テクノロジー・コンサルタント